

# 日本語テキストにおける事象間の時間関係について

— 継起性を中心に関連性理論の視点から —

## Temporal Structures in Japanese Text : A Relevance Theory Perspective concerning Serial Events

内 山 潤

Jun UCHIYAMA

### 1. はじめに

工藤（1995）では、日本語のアスペクトが、複数の述語によって表される事象間の時間関係の違いである、タクシスと連動することを指摘している。工藤によると、日本語のアスペクトは、スル（シタ）とシテイル（シテイタ）によって表現される〈完成相－継続相〉の対立が基本である。完成相は、時間のなかに現象する運動を〈継続性を無視して時間的に限界づけてとらえる〉アスペクトであり、継続相は〈時間的限界を無視して継続的にとらえる〉アスペクトである。

完成相・継続相の違いは、現実世界における現象の時間的な長さを反映したものではないことを工藤（1995）では以下の2つの例を挙げて説明しているとされている。

- (1) 「あと5分ほどで終わります。ここでお待ちになりますか」「いえ、その辺を歩いています。終わったら呼んでください」
- (2) 「あしたはまず、松山城周辺を歩く。それからバスで奥道後へ行こう」

（工藤 1995 p.62の用例）

現実世界での客観的時間の長さで考えた場合、前者はおよそ5分前後であり、後者は正

確には不明だが前者より長いと推測できる。にも関わらず、前者にはシテイル、後者にはスルの形が使われている。工藤は、これをアスペクトが話者の〈とらえかた〉の違いを反映するカテゴリーであり、客観的事実としては同じであっても、継続性を無視して点的にとらえればスルで、時間的に限界づけないで継続的に捉えればシテイルで言い表すことができる」と説明している。

以上のように、アスペクトは時間的に展開する動作を話者がどのように捉えるかというを表す文法カテゴリーである。工藤はこの捉え方の違いを表すカテゴリーの違いがなぜ必要になるのか、という視点から、その機能としてタクシス（*taxi*）という概念を導入している。タクシスは複数の文によって構成されたテキストにおいて、それぞれの文が表す事象の時間関係を表すカテゴリーである。ここで、2つの文で構成されるテキストを想定し、第1文で表される事象をA、第2文で表される事象をBとする。AとBの間には、BはAの後に起こる（後続性）、BはAの前に起こる（先行性）、BはAと同時に起こる（同時性）という3つの時間的關係が基本的に想定可能である。

工藤は、このタクシスをアスペクトのもつ本質的機能であると主張している。具体的には、完成相のスルは動作を時間的に限界づけて圧縮的にとらえる。後続する文が表す動作は前の動作の完了後に開始するものとして捉えられ、スルの連続は時間の展開の中で次々と起こってくる出来事の連鎖を表す。ここから、完成相スルのアスペクトは、継起というタクシスを表す機能を持つ。一方、継続相のシテイルは、動作の時間的限界を無視して、継続的にとらえる。後続する文が表す動作が生起する時点で先行する動作は完了していないことになり、2つの動作が部分的にオーバーラップしていることを表すことになる。ここから、継続相シテイルのアスペクトは、同時というタクシスを表す機能を持つ。

この結果、完成相のスルを使った場合と継続相のシテイルを使った場合には、事態の次のような違いが生じる、工藤の例を引用する。

(3) 飛行機が墜落した。消防隊が現場にかけつけた。負傷者が助けだされた。

(4) 飛行機が墜落していた。消防隊が現場にかけつけていた。負傷者が助けだされていた。

(工藤 1995 p.35の用例)

前者は、「墜落した」「かけつけた」「助けだされた」がこの順で継起的に起きたととらえられており、結果として墜落から一連の事態を見ていた人がその順に報告をしているという表現になる。後者では「墜落していた」「かけつけていた」「助け出されていた」が同時になり、一報を受けて現場に到着した人が「墜落した飛行機」「かけつけていた消防隊」「助け出されている負傷者」を同時に認識したという表現になる。

## 2. 須田 (2010) と庵 (2007) の研究

以上の議論に対して、須田 (2010) は「会

話文においては、完成相の表す動作は、いかなる個別的な意味においても、接続詞などの手段によらず、それ自体によって、継起的な関係を表すことはない」(p.216)と指摘している。その上で、「完成相が一連の他の動作と継起的な関係を結ぶのは、本質的に小説の地の文においてである」(p.216-217)とし、さらに小説の地の文であっても、完成相がな継起的な動作を表さない場合として、以下の例を挙げている。

(5) 何処のチャーチか教えて貰って、三四郎はよし子に別れた。横町を三つ程曲がると、すぐ前へ出た。三四郎は全く耶蘇教に縁のない男である。チャーチの中は覗いてみた事もない。前へ立って、建物を眺めた。説教の掲示を読んだ。鉄柵の所を行ったり来たりした。ある時は寄り掛ってみた。

(須田 2010 p.218の用例)

確かに、この用例では、「眺めた」「読んだ」の連続は、後続の「行ったり来たりした」「寄り掛かってみた」も含めて、初めて教会に行った三四郎の不慣れな行動を、順不同で例示していると解釈した方が適切であろう。小説の地の文であっても、完成相の連続がいつでも継起を表すとは限らないことが分かる。ここから、どのような場合に完成相の連続が継起を表す(表さない)のかが問題になる。

また、タクシスを、理論上どのカテゴリに属するものとして捉えるかについても問題がある。タクシスは複数の文の間の時間関係を表すものであるから、その性質上文法的カテゴリには収まり得ない。工藤自身は、「スル(シタ)とシテイル(シテイタ)を厳密に使い分けなければ、文章が書けない、あるいは、うまく会話ができない、つまりは、テキストの結束性(coherence)がくずれるのである。」(p.63)と主張しており、タクシスの結束性

の一つとして捉えているようである。

しかし、庵(2007)が「確かにアスペクトの選択はテキストの形成に参与するが、それは本書で言う結束性ではない」(p.71)と述べている通り、タクシスは、ハリディ・ハサン(1976)の提唱した結束性の概念には当てはまらない。ハリディ・ハサン(1976)の定義では、結束性は、

結束性の概念が生じるのは、談話のある要素の解釈(INTERPRETATION)が別の要素の解釈に依存する場合である。一方を効果的に解読するためには他方に頼らなければならないという意味で、一方は他方を前提(PRESUPPOSE)とする。こういうことが生じるとき結束関係が成立する。その結果、前提語と被前提語という2つの要素が、少なくとも潜在的には、統合されて1つのテキストになるのである。(p.5)

とされている。2文の関係で見た場合、先行する文である人物が登場し、後続する文でその人物が文脈指示によって指示されたような場合がこれに相当する。この場合は第2文を解釈するためには、第1文が必要であるという依存関係が成立する。これが2つの文を結びつけ、結束関係が成立する。

以上のことから、庵(2007)は、時間関係と形式の選択の間の対応関係が文脈に関係なく成り立つことを理由に、「タクシスは『無文脈』レベルの問題であり、磁場表現のような『閉文脈』レベルの問題ではないのである」(p.72)として、「アスペクト・テンス形式などの結束装置と考えられそうな要素について考察したが、そのいずれも本書で言う意味の結束装置とは考えられないことがわかった。」(p.75)と結論付けている。

以上、完成相アスペクトの連続が継起性を表すのは、小説の地の文のみであり、小説の

地の文においても必ず継起性を表すわけではない(須田2010)、アスペクトの違いがテキストの成立に参与するのは確かだが、それは結束性と呼ばれるものではない(庵2007)という工藤(1995)の主張に対する2つの批判を見てきた。ここから、どのような場合に完成相の文連続の間に継起という時間関係が成立するのか、ということが問題になる。さらに、タクシスは、理論上どのカテゴリに配置できるのか、タクシスが聞き手・読者に解釈されるのはどのようなプロセスによるものか、ということも問題である。

### 3. 研究の目的

前節では須田(2010)および庵(2007)における、工藤(1995)の分析への批判を取り上げた。ここでは、改めて、工藤(1995)における継起性の性質について考察するために、まず工藤における例を引用する。

(6) かれは、追われるように崖に近い岩陰にとび込んだ。その狭い空間には、多くの兵と住民たちが身をかがめていた。

兵の一人が、子供を抱いた女に銃をつきつけていた。

「いいか、子供が泣いたら殺すぞ。敵に気づかれれば、火炎放射器で全員がやられるんだ」

女は、機械的にうなずきつづけていた。

そのうちに、ふと笑うような泣きむせぶような低い声が、背後できこえた。振り向くと、銃をつきつけられた女が、顔を仰向かせ、唇をふるわせている。女のかたくにぎりしめられた両掌の間には、ながい舌を出した嬰兒の首がしめつけられていた。

「馬乗りがはじまった」

駆け込んできた兵が、血の気の失せた顔で叫んだ。そして、

「ここにも敵がくるぞ、火炎放射器でやられるぞ」と言った。

住民も兵も、おびえたように立ち上がった。

(工藤 1995 p.64-5の用例, 下線は筆者) この例では、下線を引いた完成相のスル(シタ)の形の述語を抜き出すと、「とび込んだ」→「きこえた」→「叫んだ」→「言った」→「立ち上がった」の順で動作が展開しており、確かに継起性が成立している。この用例は工藤が「一方では継起的=通時的パースペクティブを、他方では同時的=共時的パースペクティブを持ちながら、立体的にテキストが構成されていく」(p.65)と解説している例であり、継続相のシテイルの使用も併せてみると、工藤の理論に非常に適合した例である。

しかし、完成相の部分だけ抜き出してみると、いくつかの特徴も見えてとれる。まず、完成相の文が直接連続しているのは、最後の「言った」と「立ち上がった」の組合せのみであり、その他の組合せでは、間に継続相の文連続や、引用節がはさまれている。さらに、事象としても、時間的に直接連続していると解釈できるのは、「叫んだ」「言った」「立ち上がった」の部分であり、「とび込んだ」→「きこえた」と「きこえた」→「叫んだ」の間には一定の時間の経過を読みとることができる。

全体として、事象がこの順で推移したという継起性は読みとることができる。ここで、問題になるのは、この継起性のタクシスがアスペクトから直接導き出されるものかどうかである。この種の継起性が、小説の地の文のみ見られるものであるという須田(2010)の指摘はもっともなものであるし、(5)で挙げた須田の例文では、同じように完成相の文が連続しているのに継起性の意味を読み取るこ

とができない。(6)では読みとることができる継起性が(5)ではなぜ読みとることができないのかという問題は残る。

継起性を完成相のアスペクトの機能として考えた場合、より問題になるのは、たとえ語りのテキストであっても、継起性を持った事象を表そうとする場合に、完成相の文連続が適さない場合があるということである。完成相の文連続以外にも、テ形接続および、連用形接続の複文が、継起性を表す場合があることは、南(1974)<sup>1)</sup>など様々な研究で指摘されている。

- (7) a. \*戸をボタンとしてみた。出ていってしまった。  
b. 戸をボタンとしてみて、出ていってしまった。

(南 1974 p.123の用例)

- (8) a. まずエンジンをとめる。次にサイドブレーキをかける。  
b. まずエンジンをとめ、次にサイドブレーキをかける。

(南 1974 p.123の用例)

b. はテ形接続および連用形接続が継起性を表す場合の南の用例、a. はそれを完成相の文連続に置き換えたものであるが、(7a)と(8a)の容認性には違いが見られる。テ形接続か連用形接続かの違いは、(7b)と(8b)の接続形を入れ換えても問題ないことから、この場合は問題ではない。(8a)は継起の文連続として問題ないが、(7a)に関してはそのままでは容認しがたい。同様に、単純な動作を継起的に並べていく場合、テ形や連用形接続による複文に比べて、完成相を並べた文連続は容認性が下がるようである。

- (9) a. 家に帰った。夕食を食べた。パソコンの前に座った。  
b. 家に帰って、夕食を食べ、パソコンの前に座った。

タクシスが完成相のアスペクトから自動的に解釈されるものだとすると、この違いは説明できない。一方で完成相／継続相というアスペクトの違いが、継起性の成立に影響を与えていることは、継続相のテイルでは継起性の解釈は生じ得ないことから間違いないと考えられる。しかし、継起性が完成相のアスペクトから直に読みとられるものならば、単純に動作を並べたもの、つまり最も典型的な継起性の事象において、完成相の文連続の容認性が下がる理由が説明できない。これを説明するためには、継起性のタクシスがどのようなプロセスを経て読みとられるのかということが問題になる。

工藤は、タクシスを時間的結束性として扱っていたが、この扱いに問題があることは庵(2007)に指摘されている通りである。そこで、本稿では、関連性理論の枠組を用い、タクシスを語用論的な推論によって導き出される時間関係として考察する。その上で、複文の場合と完成相の文連続の場合で容認可能性に差が出るプロセスについても考察し、完成相の文連続がどのような場合に継起性のタクシスを持つものとして解釈されるのかを説明することを目的とする。

#### 4. 関連性理論

関連性理論は、スペルベルとウィルソン(1999)によって提唱された、意図明示的な伝達についての理論である。以下、東森・吉村(2003)の説明を元に関連性理論の概略を整理する。一般の伝達において、与えられた新情報は、受け手の既に持っている旧情報とあわせて推論が行なわれ、受け手の認知環境を修正する効果(認知効果)を持つ。認知効果は具体的には、旧情報と新情報を前提として推論した結果、1) 帰結として新たな文脈含意を得る、2) 推論の既存の想定を強めら

れる、3) 既存の想定が削除される、の3つがある。スペルベルとウィルソンは、ある新情報が特定の文脈において認知効果を生み出す場合、その新情報はその文脈において関連性を持つとしている。

次に関連性の程度について説明する。上記の定義から、関連性は得られる認知効果が大きいほど増大する。これだけは、より多くの文脈情報との推論を行うことで、ほぼ無限に関連性は増大していくことになる。しかし、関連性の程度の決定には、発話を処理する際に必要とされる「処理能力」も関係する。「他の条件が等しければ、その情報をもつ認知効果が大きければ大きいほど関連性があり、その情報を処理するのに必要とされる処理労力が多ければ多いほど、関連性の度合いが低くなる。(東森・吉村 2003 p.13)」このため前述の無限に続く推論は、得られる認知効果が、必要とされる処理労力に見合わなくなった時点で停止する。このプロセスによって、発話から最大の関連性が得られる。

以上の議論から、スペルベルとウィルソンは、以下のような関連性の原則を提案している。

〈関連性の認知原則〉

(Cognitive Principle of Relevance) : 人間の認知は、関連性の最大化と連動するように働く傾向がある。

〈関連性の伝達原則〉

(Communicative Principle of Relevance) : すべての意図明示的伝達行為は、それ自体の最適な関連性を見込みを伝達する。

(東森・吉村 2003 p.18)

次に関連性理論における発話解釈の過程は次のようなものである。発話解釈には、a. 発話の論理形式、b. 表意、c. 推意の3つのレベルが関与する。発話は言語解析装置で解読されて、a. 発話の論理形式を得る。多く

の場合、論理形式は十分な命題形式を持っていない。論理形式は、1) 一義化：多義語の意味の決定、2) 飽和：発話内の言語形式が要求するスロット（指示詞など）を文脈から補充、3) 自由拡充：言語形式が要求する以外の情報を補充、4) アドホック概念形成：語彙概念を文脈に合うように語用論的に調整というプロセスを経て、真偽判定可能な命題形式を持つ。b. 表意を得る。表意はさらに、文脈にある旧情報と併せて演繹処理され、c. 推意を得る。関連性理論では、命題形式から表意を導出するプロセスでも、表意から推意を導出するプロセスでも、共に語用論的プロセスが使われ、関連性の原則に従う。

このため、発話には明示的に表されていない内容が解釈される時、その内容が表意を導出するプロセスによるものなのか、推意を導出するプロセスによるものなのかは、しばしば曖昧である。それが表意なのか推意なのかを決定するのは、その発話の真偽判断に関係するかどうかである。カーストン (2008) では、表意なのか推意なのかを決定する際に用いられる基準として、機能的独立性の基準と演算子スコープに埋め込むテストを挙げている。

機能的独立性の基準とは、表意と推意は機能的に独立しているというものである。具体的には、語用論的プロセスで決定されたと考えられる「意味の側面」が、あとに続く文脈効果を得るための推論において表意の役割を組み込んでいるとすると、それは表意であるというものである。演算子スコープに埋め込むテストとは、語用論的プロセスで決定された「意味の側面」が、否定や条件などの論理演算子のスコープに収まるとき、それは表意であるというものである。

#### 4.1 関連性理論における継起の扱い

関連性理論の中で、継起の問題は、And連

言文の分析において頻繁に取り上げられる。ここでは、カーストン (2008) における議論を紹介する。カーストンでは、Grice (1981) の例を引用して、議論を始めている。

- (10) a. He took off his boots and got into bed.  
b. He got into bed and took off his boots.  
c.  $P \& Q = Q \& P$

(カーストン 2008 p.335)

論理学では、論理演算子&は (10c) にある通り、前項と後項を入れ換えても真理条件的に同一である。つまり、(10a) と (10b) は同一の意味を表すことになる。しかし、現実の発話においては、(10a) では“took off his boots”が、(10b) では“got into bed”が時間的に先行することになり、異った解釈を受ける。つまり、この場合現実の発話では、“and”は“and then”と解釈され、継起的な意味が発生している。

“and”が“and then”と解釈されることについては、まず、意味論的な説明が考えられる。これは、“then”の意味が“and”という連辞にコーディングされているというものである。しかし、カーストンは、これらの説明を以下の2つの理由で退けている。まず、“and”によってつながれた二つの連言肢間の関係は単なる時の連続よりずっと多様なものを包含する必要がある。

- (11) a. It's summer in England and it's winter in New Zealand.  
b. He handed her the scalpel and she made the incision.  
c. We spent the day in town and I went to Harrods.  
d. She shot him in the head and he died instantly.  
e. He left her and she took to the bottle.  
f. He was shortsighted and mistook her for a hatstand.

- g. She went to the yoga class and found it very calming.  
h. I forgot to hide the cake and the children consumed it.

(カーストン 2008 p.337)

(11a) は時間的に見ると、二つの連言肢が表す事象は同時的である。(11b) は二つの事象が連続的に起こる場合であるのに対し、(11c) では内包的、つまり “spent the day in town” に “went to Harrods” は時間的に含まれている。つまり、“and” によって表される意味を意味論的にコーディングしようとする時、時間的な側面だけでも、「同時的」「継起的」「内包的」という互いに矛盾する意味を同じ “and” にコーディングしなければならないことになる時、カーストンは主張する。

次に、andがない場合も、同じ時間関係と因果関係が生じることがあるということである。

- (12) a. It's summer in England. It's winter in New Zealand.  
b. He handed her the scalpel. She made the incision.  
c. We spent the day in town. I went to Harrods.

(カーストン 2008 p.338)

この現象は、意味が “and” にコーディングされているとすると、全く説明できない。以上の議論から、カーストンは “then” などの “and” で繋がれた連言肢間で解釈される意味は、語用論的に決定されるものであるとしている。

次に、カーストンは、連辞andがある場合の連言肢関係は、対応する連辞のないものによっても同じように得られることになるかも知れないが、その逆は成り立たないとしている。連辞andがある場合とない場合で意味が変わってくる典型的な例は以下のようなものである。

- (13) a. John broke his leg. He tripped and fell.  
b. John broke his leg and he tripped and fell.

(カーストン 2008 p.339)

(13a) においては、第二文で提示されている “tripped and fell (つまづいてころんだ)” が、第一文で提示されている “broke his leg (足を骨折した)” の説明を提供するものとして理解されうるが、(13b) ではそのように解釈することはできない。つまり、連言肢なしの場合は逆行的な因果関係を表示し得るのに対し、連辞andで繋がれた場合にはその解釈は不可能になるのである。

カーストンは、この違いを、最適な関連性の見込みを担っている単位の違いという観点から説明している。まず、連辞andで繋がれた2つの連言肢の間関係は、(14)のように、演算子スコープに埋め込むことができ、真理条件的含意であることがわかる。

- (14) a. Either he left her and she took to the bottle or she took to the bottle and he left her.  
b. It's better to do your PhD and get a job than to get a job and do your PhD.  
c. He didn't go to a bank and steal some money; he stole some money and went to a bank.

(カーストン 2008 p.342)

“and then” の意味が演算子スコープに埋め込まれないとすると、(14a) は「PかPか」、(14b) は「PよりはPの方がよい」、(14c) は「PではなくPである」という自己矛盾となる。つまり、どの場合でも、連言肢間に語用論的に読みとられる関係は表意に貢献している<sup>2)</sup>。ここから、連辞 “and” の場合、連言肢間関係は推意ではなく、表意であり自由拡充によって到達される。これに対して、

連言肢なしの場合、両者の関係は推意である。

一般化すれば次のようになろう。推論される事象間の因果関係は、発話が単一の連結命題を表明するときは語用論的拡充として機能し、ひと続きの表出命題間に認められるときは推意として機能する。

(カーストン 2008 p.363)

このことは、連辞andがある場合とない場合で、最適な関連性の見込みを担う単位が違うことに反映している。まず、連辞andがない場合は、個々の命題が関連性の見込みを担う単位となる。つまり、後続の命題は先行する命題を含む文脈において最大の関連性を持つものとして処理される。連辞andがある場合、最適な関連性への見込みを担う単位となるのは、連結された複合命題であって、個々の連言肢ではない。個々の連言肢はそれ自体関連性を持つが、個々に適切な効果がもたらされるという見込みが自動的にあるわけではない。

(13a)における関連性は次のように分析される。まず、新しい情報Pつまり「ジョンが足の骨を折った」という情報を受けとった時、一般的に「-であるからPである」という想定スキーマが構築される。そこから「-」を埋める情報が関連性を持つことになる。ここで、第二文の「つまづいてころんだ」という情報は「-」を満たし最適関連性の見込みに合致する解釈となる。つまり第一文が想定スキーマを通して問いを形成し、第二文がその答えを与える。カーストン (2008) は、and連言文に説明的解釈がない理由を「説明とは『なぜ』とか『どのようにして』といった問いの答えであり、『問いと答えは性質上独立した発話であって、個々が関連性の原理を満たすものである (Blakemore 1987: 123)』からである (カーストン 2008 p.367)」と結論付けている。

最後にカーストン (2008) において、継起性の意味がどのように推論されるのかという説明を見ていく。まず前提として、カーストンは最適関連性の処理労力に貢献するもっとも大切な要素は文脈想定と呼び出し可能性であるという事実を指摘している。その上で、頻繁に経験する行動や出来事とプロセス、これらの連続したものがフレームとかスクリプトとして塊で蓄えられているという認知の研究で広く仮定された事実に言及している。具体的には、例えば、(11b) の発話を耳にしたとき、聞き手は外科手術のスクリプトや、より一般的な人が相手に何かを手渡し、その人がそれを使って何かをするというスキーマを呼び出すとしている。そこから瞬時に、メスを手にしてから切開が行なわれ、そのメスが切開のために使われるということが想定される。

このプロセスによって連言肢の間には継起の意味が発生するが、それは必ずしも論理的必然性を意味するものではない。論理的には、(11b) からは「彼は彼女にメスを渡すと同時に、彼女は自分のポケットナイフを使って切開をした。」という拡充もあり得る。しかし、聞き手はもっとも呼び出しやすい解釈を構築し、それが関連性の見込みを満足させればそこでやめるという関連性の原理から、最初の「メスを手にしてから切開が行なわれ、そのメスが切開のために使われる」に到達した時点で関連性の見込みは満足され、ほかの呼び出し可能性の低い解釈まで到達することはない。

しかし、全ての継起関係が伝達される連言が、一般的なスクリプトの存在を前提にしているとは考え難い。この点に関して、カーストン (2008) は、以下のような例を挙げている。

- (15) a. Mary put on her tutu and did a highland fling.<sup>3)</sup>  
b. Bill saw his therapist and fell down

manhole.

(カーストン 2008 p.376)

これらはいずれもステレオタイプの例が存在しない例である。カーストンはこれらの例について、求められるべきは特定の語用論的説明ではなく、むしろ一般的な認知にかかわる説明であるとし、これを人間の一般的な情報処理の問題として説明している。

前提となる情報処理の特性は次のようなものである。人間が時間的近接する出来事を処理する場合、そこには必ず順序が存在する。その結果、第二の出来事の処理は第一の出来事を先に処理した文脈で行なわれる。人間にとって、このやり方で処理することは極めて自然なことである。さらに、処理労力の観点からも、出来事が時間的順序に沿って提示される場合に処理労力は最小のものとなる。

以上の考察から、カーストンは、「時間的連続の推論は、処理上の容易さへの考慮と連続的に出来事が起こる場合のスキプトの二つによって支持される」と結論付けている。

## 5. 日本語への適用

前節で、カーストン (2008) の議論から、関連性理論においてタクシスがどのように取り扱われるかについて見た。継起に関わる部分をまとめると以下の通りである。

- I. 連辞andがある場合も、ない場合も、継起性は意味論的にコーディングされているのではなく、語用論のプロセスによって導出される。
- II. 連辞andがある場合継起性は自由補充によって表意として導出されるのに対し、ない場合は関連性の原理によって推意として導出される。
- III. 連辞andがない場合、最適関連性の見込みに合致する解釈として、まず説明的解釈が優先される。結果として因果

関係が逆転し、時間的順序も継起とは逆になる。

- IV. 連辞andがある場合は、連言肢間には(3)のプロセスは働かないため、結果として継起的な解釈となる。
- V. 継起性への推論は、処理上の容易さへの考慮と連続的に出来事が起こる場合のスキプトの二つによって支持される

この説明を日本語に当てはめようとする場合、日本語と英語の違いにより、まずIII.の部分が問題になる。日本語には、第二文が第一文の説明となる場合に、それを形態的にも示すノダというovert markerが存在する。

- (17) a. 太郎は足を折った。つまりいて転んだのだ。
- b. 太郎は足を折った。つまりいて転んだ。
- c. 太郎は足を折って(折り)、つまりいて転んだ。

後続文にノダを持つ(17a)は、英語と同じように、説明的解釈となる。しかし、ノダを持たない(17b)については、説明的解釈は取り得ず、継起的な解釈以外は考えられない。連辞によって2文をつないだ(17c)も、当然継起的な解釈になる。

一方、ノダを付けた場合には、IVの原則は英語と同じように働く。

- (18) 太郎は足を折って(折り)、つまりいて転んだのだ。

(18)においても、連言肢の間に説明的な解釈は成り立たない。(17a)と(18)の解釈の違いから連辞による接続の場合、命題間の関係を導出するのは自由補充であり、両者の間に最適関連性の原理が働かないのは、日本語でも同じであることがわかる。

カーストンの説明に従った場合、日本語における解釈は次のようなものになると考えら

れる。日本語においても、連辞がない場合、説明的な解釈が優先される。しかし、日本語には英語と違い overt marker のノダがあるため、後続文がノダ文でない場合は説明的解釈は呼び出されない。結果として残るのは継起的な解釈であり、(17b) は継起として解釈される。結果として、日本語の場合、ノダの付かない完成相が連続する文連続が担うことができる関連性の見込みは、連辞を付けた場合とほぼ変わらないということが予想される。

テ形接続や連用形接続の場合と、単なる完成相の文連続の場合で、最も大きく異なるのは、前者では複文全体が最大関連性の見込みを担うのに対して、後者においてはそれぞれの文の表す命題が単独で最大関連性を見込みを担うということである。ここから、完成相の文連続によって継起性を表せるのは、それぞれの命題が単独でも最大関連性を見込みを満足させるだけの関連性がある場合に限られるという予測が成り立つ。

(19) 男はそれを自分で飲んでみた。すがすがしい味がした。男は椅子に腰をかけ、ききめがあらわれるのを待った。

そのうち、男は立ちあがり、外へ出た。急ぎ足で歩きつづけ、ついたところはエフ博士の研究所だった。

(「盗んだ書類」)

(19) は、最後の文を除き、全て連用形接続の複文と完成相の文連続で構成され、「飲んでみる」→「(味が) する」→「(腰を) かける」→「待つ」→「立ちあがる」→「出る」という順で継起性が読み取れる。先行文脈は、男がエフ博士の研究所から効果不明の薬の調合法を盗み出し、その製法にしたがって薬を調合したというものである。完成相で単独の文として表示されている「男はそれを自分で飲んでみた」はこの文脈において強い関連性を持つ。これに対して、連用形接続の「(腰を)

かける」と「立ちあがる」は、ほぼ字義通りの動作を表しているのみであり、この文脈で単独で特に関連性を持つものではない。つまり、単独で最大関連性を見込みを担える要素は単独で記述され、そうではない要素は従属節として記述されているという関係が見てとれる。

継起を構成する2つの文が、それぞれ単独にその他の文と関連性を持つ場合もある。

(20) ①博士はしかめつらしい表情で砂をすくいあげ、それを試験官のなかに集めていたが、そのうち妙なものを目にとめた。

②それは、ひとつの壺であった。③波で打ちあげられたものか、波に洗われて砂のなかから出てきたのかはわからなかったが、見たこともない異国的な印象を与える壺だった。

④しかし、エフ博士は骨董品などには、まったく関心を抱かなかったので、それを足の先で軽くけとばした。

⑤壺はころがり、栓がはずれる。

(「合理主義者」)

①の「目にとめた」と④のけとばしたとの間には継起的な関係がある。①は②③の前提推意となり、この文脈で関連性を持つ。④はさらに⑤「ころがる」「はずれる」とも継起的な関係があり、同様に前提推意になっている。①と④の関係から、その他の関連性を持つ要素を外していくと、「博士は壺を目にして(した\*)、足の先で軽くけとばした」のような継起的関係となる。これも、完成相の文連続とした場合、容認性はやや下がると感じられる。

以上の観察から、完成相の文連続で継起性のタクシスが実現されるのは、その文の表す命題が単独でもその文脈において関連性を持つ場合であると考えられる。(7a) において容認可能性が下るよう感じられるのは、「ボタンと戸を閉める」「出て行く」という2

つの命題が、それぞれ単独に最大関連性の見込みを査定されるが、期待される関連性が見い出せないためであると分析できる。また、他の文脈によって関連性が見込みが達成できれば、容認可能性が上がることも予想できる。

最後に、工藤（1995）の「アスペクトが、出来事間の時間関係－継起、同時－を示す機能を持っている」という主張について改めて検討してみる。本稿では、工藤の言う継起が、関連性理論の推意として説明できることを見てきた。完成相の文連続が必ずしも継起性を表すとは限らないこと、継起の事態が全て完成相の文連続で表せるとは限らず、そこには最大関連性の見込みが関与していることから、少なくとも継起性に関しては、完成相の機能と言えるほどの強い関係があるとは言いがたい。継起性の場合の完成相アスペクトのタクシスに対する関与は、「継起という推意の成立を妨げない」という程度の間接的なものに留まると考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、継起性というタクシスを、関連性理論における推論によって補われるものとして考察してきた。また、カーストン（2008）の議論を基に、複文の場合と完成相の文連続との容認可能性の違いを、最適な関連性を見込む単位の違いとして説明することを試みた。この方向での説明は、継起以外の関係であっても、複文として記述するか単文の文連続として記述するかという、より一般的な問題にも適用できる可能性がある。一方で、最適な関連性を担う単位をそれぞれの命題が独立して担わなければならない場合として、カーストンが議論しているのは、最初の命題が問い、後続の命題が答えとなる場合のみである。本稿ではこの部分をやや拡大して利用したが<sup>4)</sup>、継起以外のより具体的な意味を持

つ接続にまで分析を広げるためには、より厳密な規定が必要になると考えられる。

テキストを読んで行く際に、新情報として提示された文が、先行文脈でそれまでに提示されていた事態とどのような時間的關係にあるかを理解することは、その文の理解にとっても必須である。継起については、カーストンの複文の場合は表意の形成で、文連続の場合は推意として語用論プロセスを通して導出されるという説明は有効であると考えられるが、同時性・背景の同時性・後退性という工藤が示した他のタクシスについても、同様の分析が有効であるかは個別に検証する必要がある。またアスペクトと接続詞以外の時間關係を表す副詞類がこのプロセスにどう関与しているのかについても検討を要する。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 南（1974）では、テ形接続、連用形接続の従属節でも、継起を表すものとそれ以外の意味を表すものがあるとされている。継起を表すものはB類とされているが、それ以外のものはより従属節としての独立性の高いC類に分類されている。
- 2) カーストン（2008）では、機能的独立性のテストも行なっている。結果は演算子スコープのテストと同様、連辞の意味は表意に含まれるというものであったため、ここでは省略した。
- 3) “tutu（チュチュ）”はバレエの衣裳であり、“highland fling”はスコットランドのフォークダンスであるため、両者をつなぐスクリプトの存在は想定しがたい。
- 4) カーストンが扱っているのは、連文を構成する2つの文のうち、後続する文が先行する文に対して持つ最大関連性の見込みであるが、本稿ではその他の文に対して単独で最大関連性を見込みを満足するかも考慮に入れた。

## 参考文献

庵 功雄（2007）『日本語におけるテキストの結末

- 性の研究』くろしお出版
- 工藤 真由美（1995）『アスペクト・テンス体系と  
テキスト』ひつじ書房
- 須田 義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』  
ひつじ書房
- 名嶋 義直（2007）『ノダの意味・機能－関連性理  
論の視点から－』くろしお出版
- 東森 勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展  
開－認知とコミュニケーション－』研究社
- 南 不二男（1974）『現代日本語の構造』
- ブレイクモア, D（1994）『ひとは発話をどう理解  
するか』ひつじ書房
- カーストン, R（2008）『思考と発話－明示的伝達  
の語用論－』研究社
- ハリデイM.A.K・ハサンR（1997）『テキストは  
どのように構成されるか』ひつじ書房
- スペルベル, D・ウイilson, D（1999）『関連性  
理論－伝達と認知－第2版』研究社